

## 今年度発掘調査成果の速報

### ひがしはらまち 東原町遺跡（埋納銭整理作業） （柏崎市東原町字下原19 - 1）

43号で紹介した埋納銭の整理作業が進みましたので一部を紹介します。東原町遺跡には中世と近世の遺物の包含層があります。埋納銭は中世の層から出土しました。

壺には10,647枚の銭貨が入っていました。下の写真は壺から取り出した銭貨を並べたものです。写真から分かるように、銭貨にはヒモが通されています。このまとめた状態を緇さしと呼びます。ここでは一緇97枚が基本のようです。100枚には足りませんが、これを百文として通用させていたようです。一緇ごとに結び目を作り、6緇を一連としたものもありました。

当時の日本では輸入銭貨を流通させていたため、周辺国の歴代王朝発行の銭貨が数多くみられます。この壺では67銭種が確認できます。一番古い銭は五銖（後漢：西暦24年初鑄）、最新銭は紹豊元寶（陳/ベトナム：西暦1,341年初鑄）です。壺は14世紀前半に作られたものです。銭貨と壺の製作年代から、14世紀後半頃に埋納されたものと考えられます。今後、詳しい分析を進めます。

（田海義正）



銭貨を取り出す前の珠洲焼壺



取り出した銭貨と珠洲焼の壺

## にしかわうちきた 西川内北遺跡

(北蒲原郡中条町大字西川内字家ノ浦 148 ほか)

西川内北遺跡は、越後平野北東部、胎内川の扇状地に形成された自然堤防上にあります。日本海沿岸東北自動車道建設に伴い7月から10月までの4か月間発掘調査を行い、調査対象のほぼ60%が終了しました。出土した土器から、新潟県内ではあまり例のない奈良時代を主体とした遺跡と考えられています。遺跡は浅いところに埋没しており、表土下約20cmから50cmで遺構や遺物が発見されました。

主な遺構としては、2間×3間の掘立柱建物やその可能性がある柱穴群、当時の畑の跡、土器が廃棄された川跡があります。

主な遺物としては、古代の須恵器、土師器を中心に古墳時代や中世の土器が出土しています。来年度以降、発掘調査が進行すれば、その全容が明らかになることでしょう。(佐藤優一)



遺跡全景（空撮）



掘立柱建物の柱穴



畑の跡

## いえのまえ 家ノ前遺跡

(上越市大字増沢字家ノ前 936 ほか)

家ノ前遺跡は、上越市の西部を北に向かって流れる桑取川の河岸段丘上に位置しています。北陸新幹線の建設に伴い、9月と10月に約1,300㎡を調査しました。

遺物は、縄文時代後期の土器、室町時代（500年前頃）の灯明皿・珠洲焼・越前焼・青磁、江戸時代（200年前頃）の陶磁器などがあります。しかし、出土量は少なく、後世の地形改変などにより、遺物の含まれる層が既に無くなっていた可能性が考えられます。

一方、遺構は多く検出されました。ほとんどが掘立柱建物の柱穴で、中には1.5m以上も掘り下げているものもあります。また、完形の灯明皿を意図的に埋めたと考えられる柱穴も見つかっています。しかし、遺物が出土した柱穴は少なく、大半はいつの時代に構築されたものか不明です。遺物の出土量などから、遺跡の中心となる時期は、室町時代と江戸時代と考えられ、整理作業を通して集落構造を明らかにしていきたいと思えます。(石川智紀)



遺跡遠景



掘立柱建物跡



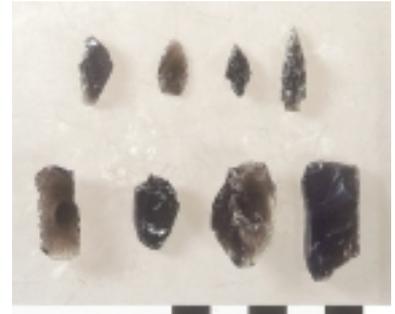
灯明皿出土状況

## 報告書作成中の遺跡

### あおた 青田遺跡

青田遺跡は、北蒲原郡加治川村大字金塚字青田に位置します。日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成11～13年度に発掘調査しました。遺跡は櫛形山脈と新潟砂丘列の間の沖積地に立地し、江戸時代に干拓された紫雲寺潟（塩津潟）のほぼ中央に位置します。時代は縄文時代晩期の最終末に所属します。

平成13年度からの整理作業により、様々なことが明らかになってきました。今回は青田遺跡で出土した石器について、自然科学分析による産地同定の結果も含めて説明します。青田遺跡で出土した石鏃や石錐などの剥片石器には、流紋岩という青田遺跡周辺で比較的容易に手に入る石材が多く利用されています。また、黒耀石という自然のガラス材も若干利用されていますが、産地同定の結果、黒耀石の大半は新発田市周辺で採取されたものであることがわかりました。青田遺跡周辺の縄文時代の遺跡では、新発田産に加えて山形県の月山など、遠隔地産出の黒耀石も利用される傾向にあります。青田遺跡では近場の黒耀石のみを利用していた可能性が高いと言えるでしょう。



黒耀石製の石器

磨製石斧は小型（長さ3～5cm程度）と大型（長さ7～10cm程度）が認められます。大型の磨製石斧は、安山岩と呼ばれる石を遺跡周辺から採取してきた後に、打撃を加えて大きさを調整し（分割・剥離）敲石（ハンマー）で叩いて形を整え（敲打）砥石で研いで仕上げる（研磨）という行程で製作されていたことが推測され、青田遺跡では各工程のものが出土しています。また、の剥離段階の際に生じた剥片や、の敲打段階に使用されたと考えられる敲石も出土しており、遺跡内で製作していたと言えます。一方、小型の磨製石斧については、全面に研磨の及んだ完成品のみが出土しており、製作段階に生じる剥片は認められません。このことから、遺跡内では製作されず、完成品が遺跡内に持ち込まれた可能性を指摘することができます。小型の磨製石斧には蛇紋岩と呼ばれる、緑色で縞状の石材が利用されています。蛇紋岩は、県内では糸魚川地域で採取できる石材です。

アクセサリーとして用いたと考えられる石製の玉も約20点出土しています。この中には管玉（くだたま）と呼ばれる細長い玉も認められ、弥生時代に所属するものと類似しています。玉には滑石・碧玉・ヒスイ・結晶片岩様緑色岩などと呼ばれる石材が用いられています。蛍光X線分析による産地同定の結果から、ヒスイは糸魚川地域に産地を求められることがわかりました。また、結晶片岩様緑色岩は現在のところ産出地は不明ですが、西日本の遺跡で出土した玉の中に同様の石材に同定されたものが認められます。このように、玉に用いられる石材は先ほど述べた黒耀石とは異なった傾向を示します。出土している点数が少ないことも考え合わせると、玉は当時の人々にとって貴重なものであったと言えるでしょう。

青田遺跡で出土した石器全てが遺跡内で作られていた訳ではなく、完成品として持ち込まれたものがあることがわかってきました。また、石材の産地同定から石器の流通範囲が明らかになり、青田遺跡で暮らしていた人々と他地域とのネットワークを垣間見ることができます。

（石丸和正）



様々な形の玉

## きたの 北野遺跡（上層）

北野遺跡は、福島県境に程近い東蒲原郡上川村大字九島字長木にあります。磐越自動車道の建設に伴い、平成5～7年に発掘調査しました。遺跡は阿賀野川の支流、常浪川左岸の段丘にあり、標高は68mです。発掘調査の結果、約5,000年前に堆積した沼沢火山灰層を挟んで上下の層から遺構・遺物が見つかりました。下層は縄文時代早期前葉～前期末葉にわたり、早期中葉、前期前葉～中葉、前期後葉～末葉の住居・集落が明らかとなり、平成14年度に報告書が刊行されました。上層は縄文時代中期前葉～後期・晩期、平安時代、中世、近世の多時期にわたります。主な遺構は縄文時代中・後期の住居63基、土坑330基、埋甕132基などです。その多くは中期末葉～後期初頭に所属し、この地域で拠点集落の初めての発掘例となりました。この他、県内で類例の少ない後期中葉の住居跡なども見つかり注目されます。

遺物は縄文時代の土器・石器などを中心に膨大に出土しています。平成16年度末までの2か年の整理で縄文集落の様子が明らかにできるものと思います。（高橋保雄）



柄鏡形敷石住居（後期初頭）



複式炉（中期末葉）



縄文土器（中期末葉～後期初頭）

## 本物と出会う - 3 -

### - 今、そこにある昔を見に行く。（現地説明会） -

今年度の調査状況を皆さんにお知らせする現地説明会を9月下旬～11月初旬にかけて、各発掘調査現場で行いました。

地元を中心にたくさんの方々が見学に来られました。また、高速バスで遠方から来られた方、家族連れでの見学なども多数あり、埋蔵文化財への興味関心の高さと広がりを示すものであったようです。

各現場とも展示会場を設営したり、現場内での遺構等の見学コースを作ったりと工夫を凝らしていました。参加者は各現場を合わせ、延べ1,000名を越えました。

現地説明会の良さは検出された本物の遺構や出土した本物の遺物を現地で間近に見られることにあります。機会がありましたら是非、ご参加下さい。事業団では来年度も現地説明会の案内を日程が決まり次第、ホームページでお知らせします。



五反田遺跡（板倉町）



余川中道遺跡（六日町）

## 第11回 遺跡発掘調査報告会のお知らせ

今年度に事業団が実施した発掘調査成果を速報する報告会を3月に上越市で行います。

今回はリージョンプラザ上越を会場にして、上越市教育委員会と共催で行います。

内容は下記の通りです。更に詳しい内容等につきましては2月に事業団のホームページ、関係機関（教委、博物館、学校等）へ配布しますポスター、チラシをご覧ください。

### 記

**日 時** 平成 16年 3月 7日（日）  
9時30分 開場（報告会は10時から）

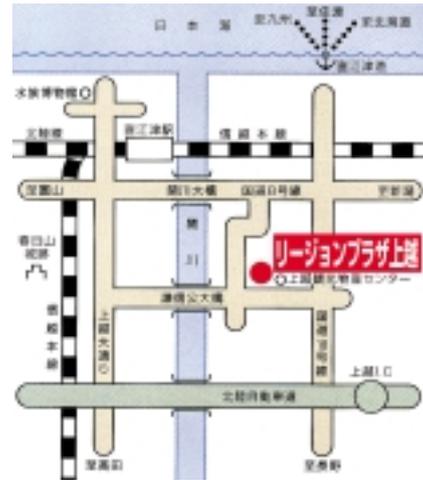
**講演会** 小島幸雄氏（上越市教育委員会）

**報告遺跡** 東原町遺跡（柏崎市）  
余川中道遺跡（六日町）  
反賞目遺跡（中条町）  
峪ノ上、五反田遺跡（上越市）  
下割遺跡（上越市）  
吹上遺跡（上越市）

**会 場** リージョンプラザ上越  
（上越市下門前446 - 2）

**入場無料**  
**主 催** （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団  
上越市教育委員会  
新潟県教育委員会

### 会場への経路



### 交通機関

**バ ス** 直江津駅からリージョン経由高田行き  
高田駅からリージョン経由直江津行き  
リージョンプラザ上越下車

**高速バス** 上越インター富岡下車（徒歩30分）

**自家用車** 上越インターから3分

駐車場は約500台

問い合わせは当事業団までお願いします。

（TEL 0250 - 25 - 3981 担当 佐藤、鈴木）

## 丸木舟

- 見る人に感動を与える縄文人からの贈り物 -

前号で紹介しましたように、青田遺跡出土の丸木舟は10月末に展示を開始しました。全長約5.4m、幅0.7mの大きさは他のどの展示物よりも存在感があります。10月17日に奈良県の元興寺文化財保存センターから運び込まれ、その後、展示ケースを取り付け公開しました。この丸木舟の特徴である平底をよく観察できるように展示台には鏡も取り付けられています。現在、土日の来館者は倍増しています。「大きいねえ」「よく残っていたなあ」など来館者の方々も興味・関心をもって見学されています。まだご覧になっていない方は、是非、お越し下さい。



センターへ搬入された舟



展示ケース取り付け前の様子



展示の様子

## 連載企画・にいがたの文字資料から 第7回

## 「地域の特徴を見る」 - 下越 -

今回は主に阿賀野川より北の、古代では沼垂郡<sup>ぬたりに</sup>・岩船郡<sup>いわふね</sup>と呼ばれた地域の特徴を見てゆきたいと思います。

昔の阿賀野川は信濃川と河口付近で合流し日本海に注いでいました。二大河川の合流は河口を中心に洪水を頻発させるため、江戸時代に海岸の砂丘を横断する大水路を開削し現在となりました。こうした土地柄のためか、「沼垂」という水と関わる地名が付けられ、ここに約1,500年前、中央政府の出先機関として淳足柵が設置されたのを機に、この地域の歴史が本格的に幕開けします。もちろん、この地域にはそれ以前から人々が生活していました。その当時の人々の中には中央政府に抵抗する人達もみられ、その平定のため淳足柵という出先機関が置かれたのです。このようなことから、この地域には出先機関を通じた中央の直接的な影響や、政府に代ってこれを管理した越後国府との関係を示す資料が発掘調査で出土しています。

現在の県庁に当たるといってよい越後国府との関係を示すのが中条町蔵ノ坪遺跡で出土した「少目御館」と記された木簡です(写真)。少目とは中央から派遣された国司の中で4番目にえらい役職に当り、通常ならば国府に勤務して中央との命令書のやりとりや保管の仕事の責任者でした。御館はこの国司の邸宅で、そこへ送られる米に荷札として付けられた木簡です。この木簡が、この地域と中央から派遣された国司や国府とを結び付けることは言うまでもないでしょう。同じ中条町では土地の測量や税の計算などでかけ算を必要とした役人が「九九」を練習した木簡が、国府の責任で中央に送る税物を記した木簡と一緒に出土し、そうした関係を一層、明瞭にしています。笹神村<sup>ほつきやう</sup>の発久遺跡では毎月の一日だけを記した木簡が出土しています。カレンダーである暦は中央の中務省<sup>なかつかさ</sup>という役所で作成され、毎年各国府に配布する決まりでした。そうした背景をもつ暦の中からわざわざ一日だけを抜き書きした者は、国府などに関係した人物である可能性が考えられるのです。

一方、文字に限らず、土器に描かれた絵でもそれが見出せます。中条町船戸桜田遺跡や淳足柵に近い新潟市の緒立C遺跡では、土器に人の顔を描いた人面墨書土器といわれるものが出土しています(写真)。都ではこのような土器に病人が息を吹きかけ、病気を土器に移した後、蓋をして川に流すと病気が治るといふ呪いに用いられたと考えられています。そのためか地方でもこうした土器は中央政府と関係しやすい役所のような遺跡で出土することが多く、その風習を反映しているものと考えられています。以上のように文字など墨で書かれた遺物からは、国府との密接な関係や国府を介した中央政府との直接的な関係が見取れます。中央政府の出先機関の設置から歴史が始まったためか、国府の強い影響下にあったものと思われる。

蔵ノ坪遺跡で「津」と書かれた墨書土器が出土しているように、下越の古代遺跡は舟という往来手段で結ばれていたと考えられています。福島潟のような潟湖は小河川を通じて阿賀野川や海とつながっていたので、その出入口に当たる河口付近には物資を集め運搬するための「蒲原津」という港<sup>かんばらのつ</sup>がありました。『延喜式』という古代の書物の中では、この港は国府が直接的に管理する「国津」とされています。国府との濃密な関係をもつ地域を背後に控えたために、河口付近にこうした港があるのも当然のように思われるのです。

こうした地域の特徴はその後の歴史にも影響します。都の天皇から政権を委ねられた鎌倉幕府の武士達の領地が下越には多く、幕府滅亡後にもこの地域だけは幕府再興を願い、上・中越とは全く異なる歴史を歩んでゆくのです。(田中一穂)



写真  
中条町蔵ノ坪遺跡  
「少目御館米五斗」  
赤外線写真



写真  
人面墨書土器「船戸桜田遺跡2次」  
中条町教育委員会

## 埋文コラム「発掘から見てきた食事風景」後編

### 包丁

現在の包丁にあたる小刀は、平安時代より以前に中国から伝来したと推測されています。絵巻物には、小刀(刀子)を用いて果物の皮をむく姿や、俎板の上で刻む様子が見られます。さらに、鎌倉時代の文献からは鞘に入った日本刀で調理人が包丁さばきを披露する記載も見受けられます。このことから、刀から派生した包丁の系譜も考えられます。刀と包丁の機能分化は、鋼鉄の産出や鍛冶技術の発展に伴う中世から近世にかけてのことです。江戸時代に入ると、料理が発展して各種包丁が出揃ってきます。上越市の宮野遺跡からは平安時代の刀子が3点出土しています。当時この集落に住んでいた人々がこれを用いて調理をしていたのでしょうか。



上：現代のステンレス洋包丁/  
下：刀子（宮野遺跡）

### 俎板

本来、俎板というのはマナ(真魚)を調理する作業台のことで、魚介や鳥獣類を調理する際に用いていました。絵巻物には、まな箸という金属製の箸で獲物をおさえつつ包丁で切る姿が見られます。中世から近世にかけては、脚の付いた机のような形が主流でした。今日では板状となつて普及していますが、「1膳、2膳…」と数える訳がわかりますね。白根市浦廻遺跡(中世)からは多数の木製品が出土しています。その中に俎板として使用されたと見られるスギの板材が1点出土しています。板材の両面には無数の刃物傷が残っています。遺跡からは、同様の傷がついた曲物の底板なども出土することがあります。俎板などの工作台、作業台として転用したのでしょうか。



俎板（浦廻遺跡） 裏面

### 搗鉢

搗鉢と同様の形で内面に放射状の卸目がないものは捏鉢と呼ばれ、平安末期頃、食品を搗り潰す食風に依じて窯業地で生産されはじめました。その後、大陸から多くの舶来品と共に搗鉢が輸入され、日本でも焼成されるようになったと考えられます。搗鉢は、当初、寺のみで使われていたようです。「へつらうこと」を「胡麻をする」と表現しますが、搗鉢の伝来当時は搗鉢そのものが珍しく、それを使用する「和物」なども高僧や賓客の食する料理でした。小僧さんが主人の特権意識をくすぐるべく、給仕していた姿が目に見えます。中世の遺跡から出土する搗鉢は、卸目が器体の内側全面にびっしりとは入っておらず、散在的に放射状の卸目が入っているのが特徴的です。これは搗るという役目ではなく、脱穀が不完全な穀物を「研ぐ」ために使用したのではないかと考え方もあります。搗鉢の目が密になり一般に「搗る」という機能を果たすのは、だいたい近世になってからのようです。新津市江内遺跡(中世・近世)からは多くの搗鉢が出土しています。写真向かって左は、見込み(内面)に8本1単位の卸目が「米」字状に確認できる中世の珠洲焼搗鉢です。同右は、近世(18世紀中葉から19世紀)の肥前系陶器搗鉢で、高台を持ち、内外面とも鉄釉が掛かり、見込みには放射状の卸目が密に入っています。(今野明子)



珠洲搗鉢（江内遺跡）

#### 引用・参考文献

「台所用具は語る」 筑摩書房 神埼宣武 1984

「考古学ジャーナル」175・177・179 「中世搗鉢考」大橋康二 1980

写真：スケールの目盛りは1マス1cmです。

県内の遺跡・遺物 43

## 分谷地 A 遺跡出土品 (平成 15 年 県指定)

遺跡所在地：北蒲原郡黒川村大字熱田坂字下谷地他

分谷地 A 遺跡は、黒川村を流れる胎内川の左岸の段丘上（標高 100m）に位置しています。調査区は、ちょうど崖斜面を挟んだ上下段に分かれています。上段（平成 12 年度調査）では、8 基の弥生時代の再葬墓から 15 個体の壺や甕が出土しました。再葬墓とは、一度死者を骨にした後、再び骨壺である土器に埋納するという独特の葬法です。この遺跡で重要な点は、再葬墓としては、国内で最北端に位置すること、従来、この地域においては、複数の土器を一度に埋納する様相がみられるのに対し、一つの土壌に一つの土器が埋納されるという、縄文時代の埋甕の要素を極めて強く残すことです。また、現在の愛知県を中心に分布する水神平式土器の流れをもつものもみられるほか、ベンガラで赤く彩られたもの、人骨の可能性のある骨片が土器内部からみつかったものなどがありました。



弥生時代再葬墓検出状況

下段（平成 13 年度調査）では、縄文時代後期の漆器類約 30 点が当時のまま色鮮やかに出土しました。なかでも、セットでみつかった赤と黒の水差し形容器のうち、黒色の漆塗り木製容器は左右均整のとれた美しい曲線の優品であり、全国でもこのような完全な形のは珍しいといえます。中に入っていた土を科学的に分析すると、ニワトコ、サルナシなどたくさんの種実がみられ、果実酒をベ - スにした飲料が入っていた可能性が高いことが分かりました。

このように弥生時代の葬送儀礼を知る上で重要な 10 点の壺形土器や甕、そして縄文時代の木工や漆工芸の高い技術水準を示す木製の鉢や糸玉、朱塗り土製耳飾など 5 点が平成 15 年に新潟県の指定文化財となりました。  
(黒川村教育委員会 伊藤崇)



分谷地 A 遺跡出土の縄文時代漆製品

### 埋文にいがたNo. 45

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新津市金津93番地1

TEL (0250) 25-3981 FAX (0250) 25-3986

e-mail: niigata@maibun.net URL: <http://www.maibun.net>

印刷 新高速印刷(株)